

平成五年の『おくのほそ道』行脚

——福島県中通り縦断の記——

横山 邦治

一

福島県の天気予報は、浜通りと中通りと会津に分けて報道されるようである。浜通りは勿来関から磐城の国の太平洋岸の相馬あたりまでをいうようであり、中通りは白河の関から奥羽街道沿いの磐城から岩代の国のことをいうようであり、会津は正に会津若松を中心とした山地をいうようである。旅中TVの天気予報を見ていてそういうことを知ったのであるが、芭蕉は『おくのほそ道』の行脚で福島県の中通りを真直に北上したということになるようである。平成五年の『おくのほそ道』は、白河の関からこの中通りを北上してみることにする。難路というものとてなさそうな道程である、阿武隈川を下る道でもある。地図を見ると福島県は大きな県のように、その台型の中央を突っ切るのが

『おくのほそ道』の道の行脚である。何となく雄大な感じの企画で五泊六日ということになったけれど、三年生の参加者が当初の申し出から減ってきて、これは中止となるかなと思っていると、大学院の有志が是非参加したいと申し出てくれて、昨年の福井県の行脚に参加してくれたOGなどなども加えての混成部隊が結成されることとなった。各人の日程の都合もあつて盛夏で盆過ぎの八月十八日水曜日から八月二十三日月曜日までの旅程となつて、酷暑の旅だろうと覚悟していたのであるが、私には未経験の冷夏で、福島県の旅中はあまり雨にこそ降られなかったけれど、毎日曇天で行脚するには楽なことであつた。

芭蕉の福島の旅は、旧暦の四月廿日は「朝霧降ル。辰中尅晴。」で白河の関にかかり、廿一日は「霧雨降、辰上尅止。」で白河の城下町を通過、廿二日と廿三日は記録がな

いけれど須賀川で晴天であつたらう、廿四日は「雷雨、暮方止。」で、廿五日は記録なく、廿六日は「小雨ス。」とある。廿七日は「曇。」で芹沢の滝に行き、廿八日は須賀川の町内巡覧で「朝之内、曇。」で、廿九日の須賀川出発の日は「快晴。」、五月朔日は郡山から「天気快晴。」の旅で一挙に福島到着、二日は「快晴。」で医王寺を拝して飯坂温泉へ、三日は「雨降ル。」巳ノ上尅止。飯坂ヲ立。桑折^{サナヅメ}へ二リ。折々小雨降ル。」とあつて雨模様となる、梅雨時となるのであらう。ともあれ福島を旅している時は、初夏の快晴の旅ということであつたようである。平成五年の行脚は、須賀川で少々は雨が降つたけれど、曇天冷夏という鬱陶しい空模様でジメジメした感じのものとなつた、汗があまり出なかつたというのも珍しい体験であつた。

二

八月十八日、水曜日、広島からひかり三十号とおおば二百十五号で瞬時に新白河である。途中の名古屋から高橋由紀さんが乗り込んでくる、昨夏福井県の行脚の時に湯尾峠から敦賀まで調査案内して下さつたOGで、今夏も同行ということである。二本松からは今一名が子供連れで参加とのこと、何よりのことである。新幹線の駅前広場に建っているホテルサンルート白河というビジネスホテルに落ち着く、今回の旅の宿舎は全て業者まかせにしてしまったので、

こんなことになるだろうとは思っていたけれど、何とも味も素気もない高級ビジネスホテルで、若い女性向きかなと慰めることである。伝統的な旅籠がいいのだからと特注しておいたのであるが、そうした旅籠は旅行業者のリストには載っていないらしいのである、ビジネスとしての予約業務がうまく機能しないのであらう。数年前に白河を訪れた時に、駅前の旅館案内所で紹介してもらつたのも同じようなホテルで、奥州街道沿いには古い旅館が何軒かあつて残念がつたことを想い出しながら、ヤレヤレと溜息でホテルを出る。旅籠だつたら宿の主人やおかみさんに尋ねると、その土地の面白い話をあれこれとしてくれた上に、市内の名所旧跡について親切に教えてもらえるのであるが、制服を来た年若い美人のフロントさんではそれは無理な話で、白河駅に行く道を聞いただけで、五万分の一の地図片手にホテルを飛び出す。

フロントさんの話では簡単に出来るはずの東北本線の白河駅に向う大通りになかなか出られない、駅前に市内バスがあるのだけれど便数が少ないので歩くことにしたのに、方向音痴的にアチコチしてバイパス的な広い通りが出る。五万分の一の地図では、市街地の道案内として不十分のようである。JRの線路の向うの丘に最近再建された三層の天守閣を有する優雅な小峯城が見える、それを目指して歩き続ける途中で、道造りのために分断された感じの墓地に

行き当る、戊辰戦争の戦死者の墓地であるごとくであるがよく判らない。JR 駅前あたりの小道に入ると、道場町というところに小峰寺という古趣のある寺に行き当る。屋根を眺めて迷い込んだのであるが、時宗の寺で一遍上人の開基と伝え、正慶年間（二三三〜三四）に結城親朝が父宗広の菩提のため搦目城の西の藤沢に堂を建立したという（平凡社・日本歴史地名大系）由緒ある寺である。中世からの城下町なのであるから、数多くの古社寺があるに違いないが、芭蕉とて満願寺参詣の後は白河の町を、中町左五左衛門ヲ尋。大野半治へ案内シテ通ル。”と黒羽への礼物を置くという目立った行動を示すけれど、黒羽の浄法寺図書などの厚遇に感銘したのであろう。白河は素通りであつてみれば、芭蕉も街道を通りながら仰いだに違いない小峰城に向う。JR 白河駅前を通り過ぎて東北本線の下の狭いトンネルの抜け道をくぐって下町めいた街路を左手に進むと、再建された瀟洒な三層の天守閣の見える広場に出る。天守やそれをめぐる楼閣はある程度完成しているのであるが、城門のところに工用的の大扉が出来ていて見物人一切シャットアウト、城跡に登るのは不可である。新築の展示場も閉館中、止むを得ず石垣をめぐって堀の内側を一周してみようと草の茂る細道を進むと、半周して石垣にさえぎられて立往生、忍者であれば石垣を登って城中に入られるのであろうが、深く蒼黒く静っている堀の水面を眺めてスグスグ

引き返す。

小峰城を左手にして旧奥州街道を進むと阿武隈川、田町大橋という橋が架っている。この阿武隈川は小峰城の外堀の役目を荷っていたと思われるが、目前の阿武隈川を見て一驚、吃驚。

”とかくして越行まゝに、あぶくま川を渡る。”と芭蕉が記した阿武隈川は、奥州街道の通過点として、阿武隈川は白河町の末、流れは奥の海へ落る。板橋百間餘、半二馬除アリ。橋世に替りて見所有。”（『陸奥衡』）と桃隣も元禄九年の旅で記している。数年前に白河で阿武隈川を見た時、清く豊かな水流があちこちで波立つほどに数多くの大石がゴロゴロと露頭しており、その有様は石と石との間を板で渡して橋とし、人と馬とが行き違う時に馬が待つために川の中ほどに石を集めて溜り場を作っていたのではないかと、桃隣の文章から想像するにふさわしいものであった、少くとも私は桃隣の表現をそのように解して納得した川の姿であった。今の目の前に流れている阿武隈川は、全く姿を変えていると言つてよい、護岸改修が完了したばかりといった阿武隈川は、両岸がキツチリしたコンクリートブロックで固められ、川底はきれいに整地されてしまっているように石一つ水面に姿を見せないで、清く美しい豊かな水がサラサラと流れていっているのである。川の下流の羅漢橋あたりに岩頭が少し露出していて、白い波頭がキラキラと見

えるぐらいで、阿武隈川上流の自然の姿が見られなくなっているのである。洪水を恐れる人間の営みは、機械力万能の現在の人間の営みは、自然の姿を強制的に変化させてしまっている、芭蕉の見た阿武隈川と、現在の阿武隈川との隔絶は、自然と人間の共生を否定しているごとくでもある。自然の怒りは、果してないのであろうかと思ひめぐらすことである。

JR白河駅前の食堂で夕食、ホテルでの一泊は白の空間での夢である。阿武隈川が泣いている、川水の波頭が消えている。

三

八月十九日、木曜日、珍しく晴天、夕方は曇りとなる。

この日以降、曇天続きで太陽の姿を見ることが少い、全国的に梅雨のような異常気象が続いた夏で、広島では連日雨模様であったと帰広後聞いたことであつたが、私どもが福島県の中通りをタクシー利用の多い行脚を続けている間、ジメジメした曇天が重苦しく私どもを圧迫したけれど、雨に降り込まれる日は幸いにして皆無であつた。ある意味では行脚し易い日々であつたわけで、白河の関跡探訪をメインとするこの日の日程も結果的にはあまり汗も出ないでこなせたのであつた。

旧陸羽街道で福島県と栃木県の県境に境の明神がある、

江戸期には関東と東北とを分つところとして印象的であつた場所である。本日の出発点で、そこまではバス便とて少ないことなのでタクシー利用、旧陸羽街道を南下していると右手に金売吉次の墓の標識あり、義経伝説の一端が早速に顔を出しているというので、小さな林の中に車を入れてもらう、小さな塚が金売吉次の墓也と主張しているのであるが、果たしていかなる伝説があるのであろうか、人家とて見当らない林中のこととて尋ねるに及ばない。

境の明神周辺は主要国道から取り残されて交通量少く、曾良の随行日記に見える小坂こそ開削されてなくなっているが、昔日の梯を残して関東と東北の二社が街道の右側即ち西向きに立ち並んでいる。かすかな木もれ日の中で一休みして旗宿の白河の旧関に向う。泉岡という集落の入口まで引返して右手の道に入っていく、数年前に浄坊寺図書の末孫の方に案内していただいた時は、マイクロスバスで曲りくねった山道を通り抜けたのだけれど、今は完全舗装された道で、ポツンポツンと人家の見える金堀の集落も草葺きの屋根は全く見られなくなっている。のどかな野道山道を抜けて旗宿に至ると、白河関跡は旧姿を存しているけれども、向い側の岡には白河関頭彰の施設が出来ていて驚く。地方の時代の村おこし策の一つなのであろう、古い関所の様子を再現している施設などは参考になるけれど、古代の白河の関そのものを考証的に再現しようとしたものではない。

さそうである、昔の関所はかくもありしかというミニチュア版である。土産物などを売っているお店も観光客が群がっているのではなく、閑散とした村おこしである。国道の向うに見える白河の関のこんもりした森を見ている方が心が休まることである。あの森の中に鎮座します白河神社は、相変らず心の行き届かない古色蒼然さであったなと思いがらであるが。

芭蕉主従も参詣した関山（大百十九米）の成就山満願寺にお参りしたいと思い、旗宿の人に問うと随分遠いところが登り口で、そこから更に歩いて一時間ぐらい登らなくてはと言われる。随行日記にも「簀ノ宿左峯迄一里半、麓ヨリ峯迄十八丁。」とあるので相当なもの、旗宿から直接に登る道はなくてグルリと関山の麓を内松・硯石・本郷土・吉ヶ沢という集落のある道を廻って、吉ヶ沢の登り口から登ることになるのだという、とにかくタクシーを呼ぶこととする。タクシーの運転手さんに追分の明神は遠いかと聞くと、すぐそこだと言うので「白河の古関ノ跡、簀ノ宿ノ下一里程下野ノ方、追分ト云所ニ関ノ明神有、相楽乍憚ノ伝也」と随行日記に見える追分の明神に一走り、一里ばかりの野道は、タクシーだと「すぐそこ」ということになる、八溝山地の北端で阿武隈川の支流杜川と那珂川の支流三蔵川の分水嶺という地点が追分で、栃木県と福島県の県境である。境の明神の関東側の社殿並の小さな神社が、伊王野

から旗宿に至る街道の西側に巨大な樹木のもとに鎮座している。地図の上で見ると境の明神と追分の明神の中間点が旗宿の白河の関跡という感じで、白河の古関は国境にはなかったように見える、要害の地に関所を置いたということなのであろうか、その由来は判らない。

追分の明神から街道を逆行して旗宿、左手に関山を仰いで関辺に至る、関山はさほど高い山とは見えないが駱駝の背のような山容で高い方の満願寺のある山は急峻かも知れないと見えるのである。関辺の登り口に弘化五年建立の壺丁目の石碑がある、トントんと登っていけそうな登り口であるが、タクシーの運転手さんもここから登るのは大変ですよと言うので、残念ながら入口で退散である。ここらあたりで行脚の素心は失せて了い、タクシー行脚に切り替えることとなり、南湖公園に直進である。老中引退後の白河楽翁の手によって享和元年に完成された公園は、もちろん芭蕉主従の知るよしとてないのであるが、私どもとしては江戸期には珍しい民衆公開の公園として一見すべきところである。園内のあちらこちらで工事中の立看板があり、小峯城跡で味わったと同じ思いをしたけれど、公園の近代化のための工事でないことを祈ることである。

運転手さんに随行日記に見える「忘ず山」「二方ノ山」「うたゝねの森」「宗祇もどし橋」を案内して欲しいと依頼する、芭蕉たちはこれらの歌枕や文学的伝誦の場所を素

通りし、須賀川の相楽等躬の話しとして随行日記に記録しているのである。ただし「宗祇もどし橋」については、^{石山へ入口}「白河ノ町右、かしまへ行道、ゑた町有。其きわ二成程かすか成橋也。」として更に宗祇もどし橋の由来の伝誦を記しており、奥州街道を更に少しそれるけれども立ち寄った気配のある描写であり表現である。南湖公園から北上して最初に宗祇もどし橋に連れていかれる、JR白河駅から東南に約一・五キロメートルばかりの旭町にある遺跡は、普通のお菓子屋さんの隣りに道が三叉路になっているところに小さな区画があり、柳の木のもとに石地蔵や芭蕉の句碑と説明板とがある。「かすか成橋」というのが今どこを指すのかは判らない、ここらあたりは、古くから商家が繁昌していたところらしく、大変立派な町家が並んでいる一画である。一際立派な土蔵造りのお屋敷の傍に入ると白山神社の分社が祭祀されている、白山信仰がこの地方にまで及んでいるのであろう。

阿武隈川の奥州街道に架るのは田町大橋、二キロメートルばかり下流に架る鹿島橋を渡り、右手に白河城下の総鎮守として尊崇を集めていた鹿島神社（奥州街道とは道筋が違うので芭蕉はおとずれていないとも思われるが、随行日記の記述では立ち寄ったとも考えられる。）を眺めながら数百米進むとうたたねの森である。田園の中に一寸した広場があり、何の木か知らないけれど二本の古木が残っており、う

たたねの森の標示があるだけ、『枕草子』に「森は云々」とあつての歌枕というが、歌枕の現況というのは大よそかくのごとくに興醒めのものが多いようである。「忘ず山」や「二方の山」は振り返って、阿武隈川の両側に見える低い山々だと運転手さんは教えてくれる、標示か何かあるけれど別に何もありませんよというので、引き返して探訪するまでのこともなしと、奥州街道に出て須賀川まで、可能なかぎり旧道を通って行って下さるようお願いする。

白河の城下町から須賀川の宿駅までは、随行日記には「置（衍字、下に「錢託壺メ式百七十文」を抹消）矢吹へ申ノ上尅三着、宿カル。白河右四里。今日昼過ヨリ快晴。宿次道程ノ帳有り。」と見え、『おくのほそ道』には阿武隈川を渡ってから、「左に会津根高く、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸・下野の地をさかひ山連なる。」とある、実際に見ることができるのは「山連なる」だけで、これから足を踏み入れる常陸の国の大観を述べている、そして更に「影沼といふ所を行くに、今日は空曇りて物影映らず。」と途次の景を記している。

芭蕉主従が宿した矢吹宿は、奥州街道の宿駅であると同時に水戸街道への分岐点でもあり、宿場の遠く東端に北流する阿武隈川の水運による物資流通の拠点として、江戸期には相当繁昌した宿駅のようなのである。白河から左手に東北自動車道を望みながら国道四号線を北上していただくので

あるが、立派に拡幅され舗装された四号線で、スイスイと進んでいく、ところどころで旧陸羽街道らしき細道が見えたと入り込んでもらうのであるが、旧姿を残しているところとは少ないようである。小田川という集落から高屋という集落の間の国道の左手に平行する旧陸羽街道は、数百米にわたって舗装もされていない道が続いており、両側の松並木も残存している。枯死する気配は全くなく、赤松の巨木が太陽の光線をさえぎるごとくに青々と繁茂している、前方を見ると松のトンネルで、薄暗いという感じでもある。頭の上まで曲りくねった松の枝がかぶさってくる、このように美しく松並木が残っているのは珍しいと言える。更に走って瀬踏という集落からは右手に東北本線をチラチラ眺めながら旧道に入る、ビルなど全く見当らない田舎の町で、繁昌したという江戸の面影は見られないのが矢吹である。旧本陣跡（古川屋）も残っているとのことであるが、タクシーで通り過ぎるのみにて探訪に及ばない。

国道四号線を更に北上を続けて鏡石の町並みに入ると、左手の入り込んだところに影沼の遺跡があるという、誅された和田平太胤長の妻が鏡を抱いて投身したと伝える沼であるが、今は広い田圃の中に鏡沼の跡だという公園めいた広場が作られているだけ、沼であったという面影がないでもないが、美田と称してもよい耕地に変わっている。芭蕉訪問当時は「物影映らず」というのであるから、蜃気楼説は

別として少くも沼らしきは実在していたのであろうが、何時のころにか新田開発によって埋め立てられて美田と変わったのであろう。時は移り、自然も人工によって変容させられているのである。

鏡石から北上して数キロ、須賀川一里塚に到着、奥州街道の江戸から五十九番目の里程標である。松の古木が数本、舗装された道の両側に残っていて塚の旧姿がほの見える。旧姿を何とか保存させたいという感じで、立派に改造舗装整備されたばかりの国道四号線が少し東寄りになって残ることが出来たのであろうか、一里担という地名も今に残っている。ここから旧奥州街道をたどって須賀川の町に入っていく、道の両側に残る商店の姿には昔日の悌が残存しているけれど、中心街に入っていくとビルの町で近代的都市の姿に変容していく。国道百十八号線と奥羽街道の交叉する十字路周辺が須賀川の中心街で、明るい近代的都市になっている。十字路を少し通り過ぎたところにあるホテル虎屋が今夜の宿舎、立地条件から言って由緒ある宿場の旅館であったのであろうが、今は完全に近代的ホテルに変じてしまっている。

これだけの道順もタクシーだから昼過ぎには到着で、須賀川宿を巡回することとする。等窮の屋敷跡のNTT須賀川の周辺を廻って裏通りの軒の栗を見学、NTT須賀川と伊藤薬局と北山陶器店が同一の敷地であったようで、ずい

分広い屋敷跡である。等窮の須賀川宿での地位を示す屋敷跡と言えるけれど、軒の栗は間違はなく等窮の屋敷内にあったのであり、『おくのほそ道』の「この宿のかたはらに」の「宿」は「ヤド」と訓むべきだと再確認することである⁽¹⁾。そしてすぐ近くで須賀川市役所の近くにある芭蕉記念館に寄る、芭蕉にことよせた地域振興としての記念館であろうが、一杯のお茶をご馳走になって見学するほどのものもなく退散。裏通りをたどって曹洞宗の万年山長松院、山門を入るとすぐに等窮の大きな句碑が見える、「あの辺ハつく羽山哉炭けふり 等窮」とある、矢部椿郎「等窮の句碑」(『奥の細道須賀川』須賀川市教育委員会編所収)によると、等窮一族の末孫である相楽定友氏所蔵の短冊二枚から選んだ句で、前書が「みちのくの標葉さかひにてよみしを」とあるとのこと、「標葉^{しなは}」というのは福島県の浜通りの双葉郡の一部だそうで、実景として筑波山が見えるところとも思えないところでの句のようである。標葉で南の方に望見した山を筑波山に見立てて作句したもの、秀句というのでなさそうであるが、昭和三十三年五月十八日にこの句碑の除幕式が挙行されたというのであるから、等窮の顕賞もずい分後の世ということになる。長松院の本堂の裏手に廻ると、等窮夫妻の墓がある。墓誌で等窮の没年が正徳五年十一月十九日と判るのであるが、当時の郷士の墓としては大変立派なもので、この街の有力者であったことは確かだ

ある。長松院を現在地に移したのが慶長十八年、それが相楽包純(岩瀬郡誌)というのであるから、等窮の先祖から長松院の大檀那であったのかも知れない。相楽氏は当地の古くからの豪族であるらしい。等窮については須賀川宿の「駅長」であるという表現がよく見られるが、宿場の駅長というのがどのような職掌なのか、私には今少し明確に把握し得ないものがあるのである。しかし広い屋敷跡の様子といい、花田植を芭蕉来遊中の廿三日に主催していたらしいことといい、芭蕉主徒を守山宿まで馬で送っていることといい、須賀川宿での有力者で富裕な階層の人であったことは確かなことであると思われる。

長松院から二百米ぐらい北上すると神炊館神社の入口に至る、平地に建立されている神社で、左手に細長い参道が玉垣に囲まれている。今このあたりを諏訪町と称しているが、江戸期には須賀川惣町の鎮守として信仰を集めた神社で、諏訪大明神と称していたようである。随行日記の須賀川滞留の最終日廿八日に「十念寺・諏訪明神へ参詣。」とあるが、その「諏訪明神」が神炊館神社なのであろう。古い神社なのであろうが、社殿など文化財級のものではなさそうである、参拝して又北上していくと須賀川幼稚園の隣りに長祿寺がある。須賀川宿の北端にあたり曹洞宗の大きな寺院である、伊達政宗によって滅亡させられた須賀川城主二階堂氏の菩提寺で、元正十七年の城攻めによって焼亡

して現在地に移ったという。夕刻で寺院内には入らないまま引き返す。

ホテル虎屋を目指して道を尋ねながら街道の一つ西側の小道を南下していると、左手に樗の巨木が一本茂っている小さな塚のような社に行き当る、小さな鳥居の左側に「須賀川城址」の石碑が見えて、二階堂為氏を祭る二階堂神社であることが判る。須賀川城の本丸のあったところで、二階堂氏が城主であったころは、今の須賀川宿の全体が城塞として構成されていたようであるが、今は数段の石段の上に小さな社殿で建立されているだけで、周辺は町屋や倉庫がビッシリ建ち並んでいる。須賀川宿の裏通りの商店街なのである。今は宮先町と称するらしい、旧街道筋に出て道を横切るとホテル虎屋である。夕闇濃い時刻、ホテルのレストランの料金は高さうなので、近所の旅館兼営の食堂に入って夕食。帰りにウロウロしていると十念寺前が出る、暗くて何も見えないので翌朝を期して退散する。ホテル虎屋の裏通りなのである。須賀川市内の行脚は、十分に安眠をもたらしたのでした。

四

八月二十日、金曜日、曇天。早朝、十念寺見学、パンフレットによると文禄元年開創で浄土宗野州大沢円通寺の末寺で、山号は来迎山、院を白道院という、二度ばかり火災

で本尊など一部を残して全て烏有に帰し、明治十年再建したとある。山門はなくて大きな石柱の門を入ると右手に巨大な芭蕉の句碑が見える。「風流の」の句碑である。女流俳人市原多代女の建立という、安政二年の年号がみえる。芭蕉主従が拝した十念寺がどのような姿をしていたのか、それを偲ぶすがとてないのであるが、街のドマン中に四千坪の寺領を今に森閑と保っているのであるから、元禄時の寺運隆昌の様と静寂の森厳を思うべきである。

今夜は二本松泊りであるが、随行日記の廿九日の条、石河滝を見て小作田村を経、守山宿から郡山に至るといって道を行脚するのは大変也と、ホテル虎屋からタクシー行脚とする。まずは芹沢の滝へ行くこととする、随行日記には須賀川出立の前日の廿七日に、「曇。三つ物ども。芹沢ノ滝へ行。」と見えるところである。タクシー行脚であるから方向がよく判らないが、須賀川の東の郊外で釈迦堂川に近い田園の中、今は芹沢町の町名である。新しく開発されているらしい団地を抜けて圃條整理された田圃の中のぬまつた小道を進むと新造の道路の斜面に芹沢の滝が出現する。滝のすぐ上は新しく出来た道路（国道二一八号線か）で、滝のそばの石組みを登っていくと、風景は一変する。一度廃絶していた滝を新しく石組みして再現したものらしく、自然破壊の後の再現であるから、水をわざわざ引いてきてあるという不自然さは止むを得ないのであろう。芹沢の滝

は別名五月雨の滝とも称し、梅雨時になるとそこらあたりの細流が溢れて滝となったところとも言われ（武藤昌義著『須賀川の今昔』所収「新しい名所、芹沢温泉」参照）、いつも飛沫をあげている滝というのではなかったのであろう。名のみことごとしき滝のごとくでもある。

ここで大きく取って返して国道一一八号線を石河滝（乙字ヶ滝）に向う、有名な須賀川の牡丹園は今回も素通りである。乙字ヶ滝の景観は初訪の時と全く変化なしで、円谷映画顕彰の巨大な恐竜の卵も足跡もそのまま存在している。初訪の時は渡らなかった乙字大橋を渡って右岸の公園内からも滝を見る、不動堂の傍に芭蕉の句碑がある。「五月雨の滝降りうつむ水かさ哉 はせを」の石碑は、文化十年の建立である。右岸からの滝の景は、左岸より素晴らしいというのでもないと思うが、随行日記によると「滝方十余丁下ヲ渡リ、上ニ登ル。歩ニテ行バ、滝ノ上渡レバ余程近由。阿武隈川也。」とあって、馬上の芭蕉たちは乙字ヶ滝の下流で舟渡しをし、右岸の道を上流に向って乙字ヶ滝へ行ったのであるから、芭蕉たちは右岸からの景を見たわけである。ところで初訪の時に左岸の小さな茶店で休んだけれど、その時會ったお婆さんは元気かなと尋ねたら閉店、向い側の家で安否を尋ねると孫のお嫁さんにあたる奥さんが、お婆さんは一昨年亡くなりましたとの返事、あの時もう九十才ぐらいだったから無理なしと納得したものの、乙字ヶ滝

の牧歌的点景が失なわれたと思うことである。

不動堂の公園から再び逆行して阿武隈川の下流にある男滝橋を渡って、市野関という集落から数キロで小作田である。タクシーの運転手さんに、芭蕉たちが通ったと思われる旧道を可能なだけ走ってもらおうよう依頼しての道である。芭蕉たちが渡ったところが男滝橋あたりかとも思うのだが、乙字の滝から男滝橋までの阿武隈川は大きく曲流していて、「十余丁」で滝という距離ではない、一里弱はありそうである。さてどのあたりで舟渡しだったのかと思うことである。随行日記によれば、「それより川を左ニナシ、沓里斗下リテ小作田村と云馬次有。」と見える小作田村が、小作田の集落である。田舎の田園風景、それも過疎的な風景が展望されるのみである。小作田からは「ソレ右式里下リ、守山宿と云馬次有。」とある守山である、小作田からJR水郡線と並行していた道が飯塚というところから山あい旧道に入って北上すると、再び水郡線と合流して守山宿である。守山の小さな街の入口に浄土真宗かと思われる大きなお寺があり、庫裏に顔を出すと接客中の和尚さんが守山宿のことを親切に説明して下さる。守山宿は水戸藩の分家松平大学頭の領地となり代官所があったとのこと、代官所は旧道の土手の獣医さんの家周辺一体であったが、明治維新後に全て失われて町屋に分割されてしまっている、大元明王は田村神社として残っているが、その他の古いお寺などはなくなっ

ていることなどである。随行日記では守山宿のことが詳細に記録されている、代官が諸星庄兵衛（二百石の旗本という）問屋が善兵衛（山中庄屋吉成善兵衛か）などの人名、本実坊・善法寺・大元明王などの神社仏閣名、雪村・金村などの書画の名がでてくるが、さてそれがいかが相なっているかが興をそられるところである。

お寺のところから左手の旧道に入っていくと、すぐに左手に小路があつて獣医さんの古い邸宅がある、何か代官所の伝承があるかとお尋ねしたら、内庭に昔の面影があるそうであるがと口ごもられて、伝承的なものは何もないそうである。住居する人に血縁がないのであるから、何も伝承がないのは当然のこと、向いの家屋敷も隣の畠地も代官所に含まれていたというから、相当な規模を有した施設であつたのであろう。“御代官諸星庄兵へ殿支配也。”とあるだけなので、芭蕉たちは代官にお目通りしたわけではなかつたろう。問屋の善兵衛のところには須賀川連中吉田幽碩の紹介状があつて“殊之外取持。”ということとなり、“大元明王”などの神社仏閣の名宝を特別拝観ということになっているようである。大元明王さんめいおうというのは、旧道の山中集落を通り過ぎて左手のポコリと突出した岡の上に鎮座しており、参道の左に幼稚園を見ながら高く急な石段を登ると、古雅で華麗な社殿が拝される。人の子一人姿を見ることはできないが、本殿前にパンフレットが置かれている、“田

村神社（鎮守山泰平寺）由来”という二枚綴りのもの、“縁起”を見ると、

○ その昔、今から一一九〇年前（延暦二十年のこと）坂上田村麿公蝦夷征伐を終えて京の都へ帰る途中、峰上に祥雲のかかるを見て、その山上に自身の守護尊である髻中の聖観音像を本尊とし一堂宇を建立し、これを鎮守山泰平寺と号したのが、この神社の縁起と言われている。（髻中の本尊は、桓武帝から賜ったものとも、母から授かったものともいわれている。）その後、大元帥名王も合わせ祭られる。

今から六百年以前の南北朝時代の終わりごろか、天台宗の学頭と真言宗の別当が置かれ、それぞれ泰平寺で御修法を修している。戦国時代においては大名の崇奉あつく、三春の田村氏は大元帥明王社を、地名の「山中」とともに三春に分祀している。また、蒲生、上杉、加藤などの諸大名も、社領を寄進している。

江戸時代になると、幕府から三百石が朱印状で認められるにいたる。また、大元明王堂（現田村神社本殿）は、幕府の命を受けた、二本松領主丹羽光重公が、一六六二年（寛文二年）に建立したものである。その時幕府は、学頭は善法院、別当は帥繼院と院号を定めている。その後守山地方は御三家の一つ水戸家の分家、松平大学頭が領主となるが、代々の守山領主も大元明王に対する崇奉

があつく、二代領主頼寛公の「大元明王記」が残されている。領主は、毎年正月十三日に、代理ではあるが参詣を欠かさなかった。

善法院は衆徒四坊と田村安積地方に十七ヶ寺を末寺に持つ本寺であり、帥繼院は衆徒八坊と同じく二十四ヶ寺を末寺に持つ本寺であった。(善法院中興開基の行惠和尚は、日光東照宮別当大衆院の住持をも兼ねている。)それぞれ境内が、一町四反と二町三反という大寺であった。明治の神仏分離後、明王堂は田村神社として残り、善法院は明治三十年に炎上し、そのあとは国道が通り倉庫やガソリンスタンドになっている。帥繼院は、三春街道ぞいにあつたが、明治四十四年に建物がとりこわされてしまった。往時をしむぶものは、庭の池のみである。

しかし、大元明王に対する民衆の信仰はあつく、つい三、四十年前までは旧暦の六月の祭礼には、近郷近在からの善男善女が大勢おしよせ、にぎわいはことのほかであった。今でも昔ほどではないが門前に店がならび、やぐらが立ち、踊りが踊られ、泰平寺聖観音、大元帥明王に対する信仰の一端をかいま見ることができる。

とある、寛文二年建立という本殿は、保存処置が不十分で剝落の気配が濃厚であるが、文化財で修理保存すべきものであろう。時流に取り残されたような集落であるからこそ残存したのであろうが、それだけに郡山市の文化財保存の

手が伸びない結果となっているのであろう。パンフには更に「松尾芭蕉の奥の細道より」とあって、

○ 一六八九年(元禄二年)旧暦四月二十九日に俳人松尾芭蕉が奥の細道の道中、大元明王堂に立ち寄ったことが、随行の曾良の日記に書かれている。

「小作田村と云馬次有、ソレより式里下り、守山宿と云馬次有。御代官諸星庄兵へ殿支配也。問屋善兵へ方へ幽碩より状被添故、殊之外取持。又、本実坊・善法寺へ矢内弥市右衛門状遣ス。則、善平へ、矢内ニテ、先大元明王へ参詣。裏門ヨリ本実坊へ寄、善法寺へ、案内シテ本実坊同道ニテ行。村雪歌仙絵、讃宗鑑之由、見物。内と、人丸・定家・業平・素性・躬恆五ふく。智証大し并金岡ガカケル不動拝す。探幽が大元明王ヲ拝ム。守山迄ハ乍単より馬ニテ被送、昼飯調て被添、守山より善兵へ馬ニテ郡山迄おくる。」

文中の問屋善兵へは、山中庄屋吉成善平衛である。今その子孫は、山中にいない。同じく文中の本実坊は、泰平寺の衆徒には見当らず、本願坊の誤記かと思われる。本願坊は、泰平寺の寺務を執っており、触れや達示はすべてここから出されていた。お堂の管理や修理も本願坊の管轄であった。本願坊は、薬師堂(醫王堂ともいった。跡地は、現宝蔵庫)の下に明治の初めまで存在していた。

善法院には、芭蕉が拝観したもののほか、数々の寺宝

があつたことが、「大元明王記」に記されている。今はほとんど行方不明になっている。

芭蕉が泰平寺を訪れた年は、明王堂が新築されてから二十七年目であつた。さぞかし立派なお堂を拝見したであらう。

裏坂の中腹に芭蕉の句碑が、建っている。

風流の初めや

奥の田植え歌

と記す、裏坂の句碑は大きなものではない。随行日記の本願坊も善法寺も廃滅し、宝物類も明治維新後の廃仏毀釈によつて散佚してしまつてゐるようである。

守山の宿場は、江戸期には三春街道と郡山街道の交叉するところで、交通の要衝としても栄えたところであるらしい。それについてもパンフに次のように記してある。

○旧三春街道 県道、須賀川・三春線と交差しながら山中の村中を通っている。長木戸墓地から羽黒坂を下り、帥継院の下を通り、中屋と旧庄屋跡の間から守山方面へ通つていた。

旧郡山街道 中屋と旧庄屋跡の間を真っすぐ北上し須賀川・三春線を横切り志下道路の下を通り、山際を大膳寺方面へぬけていた。

この郡山街道を北上するのが守山からのタクシー行脚であるが、山中の集落を出て舗装された道に出ると一本道。

五万分の一の地図でたどると日照田・大膳寺と集落を通つて金屋である。トラックなどの自動車も輻輳する道で、金屋からは金山橋で阿武隈川を渡つて日出山という郡山市街地に入る。日記には、「カナヤト云村へかゝり、アブクマ川ヲ舟ニテ越、本通日出山へ出ル。守山より郡山へ式里余。」とあるところ、金屋あたりから近代的都市の町並みに変貌し始め、金屋橋を渡ると県都ではないけれど福島県で一番人口の多い都市としての姿を見せ始める。芭蕉主従は須賀川を出立した日に郡山に到着している、「日ノ入前、郡山ニ到テ宿ス。宿ムサカリシ。」と日記に見える。江戸期は二本松領に属して城下町としての発展はなく、交通と経済の中心地として宿場町としての繁栄をした町で、「宿ムサカリシ」いうのは、郡山宿の一面を示しているのかも知れない。タクシーは郡山駅前まで、JR郡山駅から日和田駅までは東北本線の普通列車で数分。

日和田は随行日記之五月朔日の項に「天気快晴。日出の比、宿ヲ出。沓里半来テヒハダノ宿、馬次也。」とあるところ、檜皮宿は今のJR日和田駅のある集落である。駅前の郡山市立日和田公民館に寄つて、浅香山の場所を尋ねると、年若い館長さんが平成五年度の公民館要覧を提供して教えて下さる。駅前から旧街道に出て北上すると一キロ弱で浅香山という、宿場の街道を歩き始めて少して蛇骨地藏堂が左手に見える。要覧によれば「領主の娘、アヤの姫

が家臣の邪恋に従わず一家は安積沼に投げ込まれて絶えた。アヤの姫は家臣を恨み、この世を呪い大蛇となつて長い間、天変地異を起こした。或る年、人身御供に立った、佐保姫が近づこうとした大蛇に観音の経巻を投げたところ大蛇は岸の岩に頭をのせて往生した。この石が蛇枕石であり、その蛇骨で刻んだ地藏尊を祭ったのが蛇骨地藏尊（堂カ）である。”との伝説ある古いお堂である。更に進むと三本松という地名があつて街道松の残っているところがあり、一里塚があつたところらしいのであるが、今は何もそうした標示は見当らない。更にしばらく進むと右手に小高い岡があつて、浅香山公園とある。

浅香山については『おくのほそ道』でも随行日記でも詳細に記している、『おくのほそ道』には、

○檜皮の宿を離れて、浅香山あり。道より近し。このあたり沼多し。かつみ刈るころもやや近うなればと、いづれの草を花がつみとはいふぞと、人々に尋ねはれども、さらに知る人なし。沼を尋ね、人に問ひ、「かつみかつみ」と尋ね歩いて、日は山の端にかかりぬ。

とあつて、街道筋に浅香山があり、沼も多かったことが判る。随行日記には、町はづれ五六丁程過テ、あさか山有。壱里塚ノキハ也。店ノ方ニ有小山也。アサカノ沼、左ノ方谷也。皆田ニ成、沼モ少残ル。惣而ソノ辺山ハ水出ル故、いづれの谷にも田有。いにしへ皆沼ナラント思也。”とあつ

て、一里塚のあるあたりに浅香山あり、沼も残っているが多く田圃に変じていつていることが判る。新田開発がこのあたりでも着々と進んでいたのであろう。

山の登り口にあやめが植えてある、枯れかかっているが、芭蕉が「かつみかつみ」と尋ねたという記述が念頭にあって、土地の人が花菖蒲を植えて下さっているのであらう。松の巨木の多い小山に登ると四方の様子がよく見える、沼は全く見えないで街道の向うに宅地か工場団地か判らないけれど、土地造成が進捗しているらしいところも見える。

江戸期には沼が新田開発で姿を消し始め、現代では田圃が姿を消しているのであらう。要覧の説明には、日和田駅より北方六〇〇メートル旧国道の傍にある小丘で松桜が点在し、つつじ多く五月には金（全カ）山を真赤に染め丘は眺望広く車（東カ）に阿武隈高原の山々、奥羽山脈の那須連山、額取山、足（安カ）達大（太カ）良を南から西に望むことができる。（中略）松尾芭蕉の奥の細道に花かつみを尋ねて歩いたのも、この山であり、現在は公園として整備され階段のついた歩道、休台など設置され市民の絶好の憩いの地となり、よい散策地になっている。”とある、現況の説明である。日和田駅から六〇〇メートルとあるが、実際に歩いてみると一キロ以上に感じるのは、タクシー行脚でも結構疲れているのであらう。要覧には、奥州街道と松並木”とあつて、富久山町福原の家並をすぎ宝沢沼を西に

して歩いていくと、すぐ松並木にはいる。ここから、日和田、高倉まで点々と松並木が続いている。徳川初期に街道が整備されたといは（わカ）れ、奥州街道の姿が、そのままだ残り、昔の旅びとたちの心がしずかにつたわってくる。最近、いろいろの事情で枯死、その数は大分減っている。と見える。日和田から高倉の間には人家とてなく、昔日の梯が残っているのかとも思えるのであるが、再び日和田駅から二本松駅までJRである。平野からぐんぐん山地に入っていく。

二本松駅前の旅館大宗が今夜の宿泊場所である、二階建の日本旅館で、修学旅行風の雑魚寝である。この宿で由紀さんたちと一緒に東海道を歩いた仲間の一人である牧野久恵さん（旧姓岡野）が文昭君という小学生を連れて合流する。小学生の四年生が一人増えると、話題に変化が生じて楽しさ倍増である。二本松の城下町は、伏見城・棚倉城・小峯城を築いた丹羽長重・光重の二代当主が、寛永二十年に加藤氏（三万石）の跡に十一万石で移封となって入城し、今に霞ヶ城と呼ばれる雄大なスケールの城を白旗ヶ峯（山頂に応永年間畠山氏が霧ヶ城という山城を築き、今に苔むした石垣を存するという。）の山麓に築いて、城下の町を配置形にしていったものである。安達太良山地の高峻な地形と阿武隈川のでぐられた川筋にはさまれた狭大な土地に経営された町であるから、阿武隈川と奥羽街道に沿って細長く開

かれた町と言える、旧街道と二本松バイパス四号国道との間にJR東北本線が走り、二本ばかりの横小路があるだけの市街地である。織田信長の輩下とし柴田勝家と並称された丹羽長秀の長子が長重で、戦国大名として激しい浮沈をくり返した丹羽氏の終の居城と思えば、それなりの感慨は湧いてくるのである。

夕景の旅館前を散策、駅前を直角に数十米進むと街道筋に行き当る、正面に二本松神社の高い石段がそびえ立つ。左手へ街道沿いに商店街をウロウロしていると千功成という造り酒屋さんがあって、地酒で今夜はグッスリ寝込むという算段である。地勢上のことが多いのであろうが、開発に取り残された城下町という感じの強い町並である。

この度の行脚で始めてホテルでない旅館の、極めて大衆的夕食で、地酒一杯。

五

八月二十一日、土曜日、本日は曇天であるけれど、関東以西が長雨続きであるという天気予報であるにしては、日中は時に太陽の光がさし込むという具合であった。『おくのほそ道』では、檜皮の宿の花かつみ騒動に続いて「二本松より右に切れて」と通過地点としてしか記述されていない。随行日記でも「二本松の町、奥方ノはづれ二亀ガヒト云町有。」とあるだけ、城下町見物の気配は見られない。

歌枕などないところとて当然のことであろうが、平成の私どもはとにかく城下一見というので、山麓にすぐ手近く見える霞ヶ城拝見と行脚開始である。

駅前から霞ヶ城の再建された篤輪門の楼に向って二本松ガイドの絵地図片手に歩き始めたのであるが、どこでどう踏み迷ったのか霞ヶ城の裏山に抜け出してしまふ。公園的に整備された道であるから歩くのに困ることはないのであるが、歩いているところが郭内のどこらあたりなのかさっぱり判らないのである。少年隊の丘とか洗心亭とかあちらこちらに行き当たりながら、従業員の人に尋ねながら城門の上をやつとのこととで辿り着く。門内の公園では菊人形展開催中で、市民がチャリホリで市政の係員の数が多いぐらい、*「二本松の物産」* などというパンフが配布されており、いずこも同じ地域振興である。雄大な二層の楼を持つ箕輪門の再建もその一環なのであろう。

箕輪門から左の方に行けば戒石銘の巨岩があるはずであったが、裏山に迷い込んで疲れ果て、タクシーで大隣寺に向う。戒石銘は七代藩主高寛公が儒学者岩井田昨非の献策によつて霞ヶ城通用門近くの巨大な花崗岩に刻したもの、寛延二年のこととて、そこに刻された銘文 *「爾俸 爾禄 民膏 民脂 下民 易虐 上天 難欺 寛延己巳年春三月」* は、施政の方針として二本松藩の名を天下に知らしめたものという、民を重んぜよという宋太宗御製の戒石銘の転載である。

曹洞宗の巨邦山大隣寺は、藩主丹羽氏の菩提寺で、二本松の南の外れに立地する。大隣寺のパンフには *「奥の細道 第三十番霊場」* とある、本文に『おくのほそ道』や芭蕉について言及されたところは見られず、当然のこと芭蕉と大隣寺とは縁もゆかりもないはずである。藩政時代の建物は大半失なわれて本堂と経蔵ぐらいしか残っていないのとこのことであるが、丹羽家歴代の大名墓と戊辰の役で奮戦した少年隊の墓などあって、今に参拝者が絶えないようである。観光目的かどうか周辺の道路などが整備されており、落着いた公園化の寺院として再生させられているようである。

大隣寺から相当の距離を再び駅前にたどる途次、二本松古代玩具研究所の看板あり、立ち寄ってみると頑固そうな御老人が素朴な鳥型の木片玩具を手作りしている。パンフにあだたら山うずら車の解説として *「あだたら山の名は、昔、日本武尊が東国征伐の時この山の頂に登り妃弟橘姫を思い出された時の言葉より呼ばれるようになったと伝えられて居ります。うずら車は、朝鮮百濟より来た者が岩代の国に住み百歳を迎えた祈念として美しいあだたら山にちなみてこのうずら車を作り後世に遺したと伝えられて居ります。形態は寺院建立の際打ち込んだ手斧に飛ばされた木片より想を得たといわれ長寿開運の童玩として親しまれております。」* とある、二本松の名産玩具として可である。

二本松神社石段下の停留所から黒塚行のバスに乗る、芭

蕉主従は城下こそ素通りであるけれども安達ヶ原伝説の残る黒塚には立ち寄っているのである。『おくのほそ道』には

○二本松より右に切れて、里塚の岩層一見し、福島に宿る。と「一見」したと記すだけだが、随行日記には「二本松の町、奥方ノはずれに亀ガヒト云町有。ソレ右方へ切レ、右ハ田、左ハ山ギワヲ通りテ壱リ程行テ、供中ノ渡ト云テ、アブクマヲ越舟渡し有リ。その向ニ黒塚有。小_キ塚ニ杉植テ有。又、近所ニ觀音堂有。大岩石タ、ミ上_ゲタル所、後ニ有。古の黒塚ハこれならん、右ノ杉植シ所は鬼ヲウツメシ所成らん、ト別当坊申ス。天台宗也。それ右又、右ノ渡ヲ跡へ越、舟着ノ岸右細道ヲつたひ、村之内へかゝり、福岡村ト云所右二本松ノ方へ本道へ出ル。日本松右八町ノめへハ二里余。黒塚へかゝリテハ三里余有べし。八町ノめ右シノブ郡ニテ福島領也。」と詳細である。バスは亀谷というところで左折し坂道をグルグルと上下しながら安達ヶ橋のたもとに着く、奥州街道道筋を通っているであろうか、よく判らない。「亀ガヒト云町有。ソレ右方へ切レ」とあるのは、亀谷のどこかで奥州街道から別れて右の方へ黒塚への道を辿ったというのであろう。今は民家が立ち並んでいるが、当時は田と山とであったのであろうか。「壱リ程」とあるが、五万分の一の地図でアレコレ思案してみるのであるが、せいぜい半里ばかりの距離である。供中の渡しが

どこか判らないけれど、安達ヶ橋のところに絵地図には供中口古戦場とあるので、この橋のあたりに渡しがあったのであろう。兩岸ともに深くえぐられた川であるから、舟の渡し場に降りるのに難渋したのではないかなど思うことである。

橋を渡ると左手に食堂やら売店やらの入っている大きな物産館があり、看板に安達原云々とあるので何気なく入っていき、右脇の出口からトンネルを越して出てみると新開発のレジャーランド、黒塚はこのレジャーランドに取り込まれたのかと驚いていると、黒塚は全然別の所也と教えられる、建物が立派でつい迷い込んだのである。新しい建物に目を奪われずに左手の道を進むと真弓山觀世寺がある。山門内に入ると左手に巨大な岩石を積み上げたと思われる塚がある、自然石としては不自然な積み上げようであるが、これだけに巨大な岩石を古代人が積み重ねることが出来たであろうかと思うことである。古代人のトーチカ説もあるそう、笠石の形状などは奇怪で戦車の砲台のごとくでもあるけれど、東北の古代の権力者の御陵などと考えると何となく納得もできそうな気がする、それにしてもこれは何なのでありましようか、鬼女伝説が生まれても当然で、中世の人のロマンであろう。裏手の道傍に巨大な一本杉があり、鬼女の死骸を埋葬されたところと伝えられる黒塚である。その道を更に進むと阿武隈川がはるか下方に見おろせる雑

木林に突き当る、舟渡しはこの下の川端まで降りていかなくはならないが、改ためて大変だったろうと思う。芭蕉が「一見」と軽くふれているのは、芭蕉の美意識がこの黒塚にこだわるのを拒否したのであって、やはり相当な思い入れがあつて立ち寄つたとしてよいのである。

芭蕉主従は舟渡しで後戻りして、福岡村というところまで街道でない細道をたどり、福岡村で本街道に出たようである。その福岡には安達町智恵子記念館がある、高村光太郎の『智恵子抄』の智恵子の生家を記念館としたもの、安達ヶ原公園からタクシーで智恵子大橋（最近架橋されたものらしい、橋上で見る阿武隈川は絶景也との運転手さんの話で大廻りする。橋上からの景は、深く鋭くえぐられた川の中の巨岩を豊かな川水が白波で飾り、絶景と申すべきでしょう。）を渡つて福岡に至る、JR安達駅の近くで、旧街道に面して智恵子の生家はある。花霞という銘酒を造る幕末に財を成した豪家で、長沼家は昭和初年破産して一家離散したのであるが、家はそのままに保存されているようで、鉄筋の記念館とともに参観することができる。本宅の二階に四畳半ばかりの智恵子の部屋というのがあるが、櫺子窓から旧奥州街道をみる事が出来るのである。この奥州街道を元禄の時代に芭蕉たちが福島に向つていたということを、智恵子は知っていたであろうか。明治の女学校の国語の教科書に『おくのほそ道』が教材として利用されていたかどうか

も知らないが、智恵子の見た奥州街道は、元禄の奥州街道とあまり変つたところはなかったはず、今や新しい国道が旧街道に並行して出来ていて、裏道という感じになつてしまっている。

JR二本松駅に引き返して、JRで福島まで直行である、夕方から雨模様となり始めている。随行日記には「日未少シ残ル。宿キレイ也。」と福島での宿のことを記しているが、私どもの今夜の宿も福島駅前の老舗のデパートに付属した高級ホテル（ホテル辰巳屋）で、「宿豪華也」とでも記すべきであろうが、旅の情調という点では味気なしと申すべきである。雨は降っているけれども夕景までには時間があるので、芭蕉は訪れていないのだが、福島ではもつとも著名な文化財である大蔵寺の千手観音を拝観に出掛ける。福島市南の郊外で阿武隈川の対岸に小倉寺という集落があり、その集落の小高い山の頂上近いところに宝城山大蔵寺はある。弘仁八年坂上田村麿が東北鎮座のために建立したと伝えられる古刹、兵乱などで炎上廃滅、江戸期の寛文ごろから再建が始められ、明和二年までに堂塔が整備されたという。保存庫に安置されている重要文化財の木造千手観音立像は、「高さ四メートル、かやの巨材を用いた一本造で堂々たる太づくり像容、丈の高い髻のたくましい形にも特色があり、面相、体貌にも力強い張りがあつてその製作は藤原初期のもの云々」とパンフにある、黒光りする巨大

で圧倒的な量感を有する観音様である。東北の辟地にこのように巨大な仏像が、しかも藤原初期の作と言われるものが残っているのは、大変珍しいことなのであろう。ところでこの大蔵寺では、境内からの眺望が自慢のようである。パンプに「ここは眺望がよく、吾妻、安達太良の清容が指呼の間に見え、俯観すれば光りつつ蛇行する阿武隈、福島盆地が広々と展開する。」とあるごとくであらう、雨模様で夕暮という状況では、吾妻、安達太良の連峯はもちろん見えず、福島市内も薄暮の中にネオンの燈がチカチカと輝いているのみである。

ホテルのディナーは準正式のフランス料理で、マナーの時間のごとし、ワインが出るので、地酒で乾杯ということにもならない。キレイな宿で、芭蕉はどのような夜を過したのであろうか。「キレイ也」という表現は、他に見られないので、その状況が気にかかるのである。宿の造作がキレイなのであろうが、接遇もそれに準じたのであろうか。

六

八月二十二日、日曜日。曇天、昼ごろから太陽が顔を出し始める。福島での芭蕉の行動は、文字摺石を見て佐藤庄司の旧跡を尋ね、そして医王寺まで墓参して飯坂温泉に宿している。福島で宿して「明くれば、しのぶもぢ摺りの石を尋ねて、信夫の里に行く。」とある、「信夫の里」という

のは、文知摺観音堂の存在するところ、「信夫郡岡山村山口を歌枕としての古雅な呼び方でいったもの」（角川文庫脚注）を指すとされている。福島で信夫と言えば、古来信夫山を指し、歌枕となっているのはこの信夫山であり、今の信夫山公園のある山地である。この信夫山は、福島市街中心の北にある独立峰。東西に長く周囲およそ七キロという。御山と通称され、青葉山ともいわれた。東峰の熊野山（二六八・二メートル）、中峰の羽黒山（二六四・二メートル）西峰の羽山（二六七・六メートル、湯殿山とも）の三峰が高く、ほかに立石山、天狗森、薬王寺山などがある。信夫三山として信仰され、古くは女人禁制、肉食禁断の山であった。密教法具等の出土品からその信仰は平安時代までさかのぼると思われる。当山は歌名所ともされ、信夫山を詠み込んだ歌も多数つくられた（信達風土雜記、信達一統志）。（平凡社・日本歴史地名大系）というもの、文知摺観音堂のある山口の地とは、阿武隈川に架る文知摺橋の中に岡部と五十辺と東西に対峙する位置関係になる。その信夫山の麓に岩谷観音堂というお堂があり、江戸期のものであるが沢山の磨崖仏が珍しいというので、本日のタクシー行脚をここから始めることとなる。信夫山トンネルの手前から右手の小道をグルグルと登り始めて、しばらくして岩谷の観音堂、観光開発という風情もなくてパンフもない様子、岩場の小道を少し降りていくと磨崖仏の刻ってあ

る台場に出る、雨露を防ぐ岩の庇の下に左程大きくはないけれど美しく均整のとれた磨崖仏が小さきまぎまぎに刻み込まれている。南から北へ曲流する阿武隈川と信夫山の麓との間に広がる福島市街が一望される台場で、川の向うには文知摺観音をかこむ山地が見渡せる。曇天の福島市である。

五十辺という地名のところを通り過ぎて文知摺橋を渡る、随行日記に「二日快晴。福島ヲ出ル。町ハヅレ十町程過テ、イガラベ村ハヅレニ川有。川ヲ不越、右ノ方ヘ七八丁行テ、アブクマ川ヲ船ニテ越ス。岡ノ渡リト云。」とある岡部の渡りは、この文知摺橋の少し下流にでもあったろうか、五十辺村の外れの川というのは松川であろう、その川を渡らないで右の方へ七八丁行ったという、どうも今の文知摺橋周辺になりそうである。その場所を確認するに至らないが、この満々なる豊かな水量で二百メートルは十分にある川幅であつてみれば、舟渡り以外に方法はない川である。

文知摺橋から真直に正面の谷間の小山に向うと一キロあまりで文知摺観音堂である。随行日記には、「ソレヨリ十七八丁山ノ方へ行テ、谷アヒニモジズリ石アリ。柵フリテ有。草ノ観音堂有。杉檜六七本有。虎が清水と云い、浅キ水有。福島ヲ東ノ方也。其辺ヲ山口村ト云。」とあるところ、「おくのほそ道」では里の童の麦草を荒して云々の話を伝えている。当時は麦畠（「早苗とる」の発句から見ても当然のことながら芭蕉たちが訪れた時は、早苗の植えてある青々

とした田園であつたはずである。）の中を通つて観音堂に至つたのであろうが、今では田舎の風趣は残っているけれども、舗装された大きな道を通つてのお堂である。別当曹洞宗安洞禅院とパンフにある境内に入ると、正面の小高いところに寛政六年建立の芭蕉句碑が見え、その奥の谷あいには粗けずりの石の柵に囲まれた巨大な石があつて「文知摺石（鏡石）」と標示がある。石柱の柵は随行日記に記された柵と同じものであるうか、老杉が数多く生い茂つた岡の上に宝永六年再建の観音堂とか文化九年完工の多宝塔などが拝されるが、これらは芭蕉たちの見ることのなかつた建物である。随行日記には「草の観音堂」と「杉檜六七本」としか記されていないことから見て、当時は現在の境内の規模よりは小さく山かげの存在であつたのもあろうか。源融と虎女の悲恋物語に由来するお虎ケ墓は岡の上にあり、虎女が身を清めたという虎ケ清水は観音堂前の道を右手に行くといふと十数メートルで今も存する。清冽なる水とは今は称し得ないが、古姿を今に存しているのは貴重である。

文知摺石を拝観した後、随行日記には「ソレヨリ瀬ノウエへ出ルニハ、月ノ輪ノ渡リト云テ、岡ノ渡ヨリ下也。ソレヲ渡レバ、十四五丁ニテ瀬ノウエ也。山口村ヲ瀬ノ上ニ式里程也。」とある道程で医王寺を目指している。月輪の渡しは、阿武隈川の流路が西方に移つたために消滅してしまつたという、旧河道は胡桃川という細い溝川として残存

している。渡しは消滅しても地名は残っており、月輪小学校という学校もある。タクシーの運転手さんに、瀬上の対岸である向瀬上までできるだけ旧道を通って行ってくれよう頼むと、岡部から細い旧道に入ってくれ、野中の一本道をクネクネと走ってくれる。胡桃川沿いに走って、左手に広い桃園ごしに阿武隈川が見え始めると、このあたりに極く最近まで渡し場があったと言われる、文知摺橋の下流に鎌田大橋があつて、それから伊達橋まではずい分距離があるので、瀬上の対岸に渡る渡し舟が必要であつたのであろう。桃畠を抜けて阿武隈川の土手に上って見ると、雨天続きのせいでもあろうが、満ち溢れた水流がゆったりと褐色をいくらか含んだ黄緑の帯のように流れ下っている。向岸まで百メートル以上あるようであるが、土手の下にコンクリート造りの渡し場があり、ボートのような小さな舟が一そう繋留されている、これはレジャー用か。対岸まで太い鉄線が引つ張つてあるが、これに吊輪をつるして舟渡ししていたのであろう。昔日の月輪の渡しはここではないけれど、芭蕉も目前の景のごときを眺めたかと対岸に見入ることである。今は土手が高くて対岸の町並みは見えないけれど、江戸期には瀬上宿の家並みは見えていたのであろうか、それとも現在のごとくに葦の青葉が繁茂する土手の景を見たのであろうか。

タクシー行脚にて午前中の時間がたつぷりで、行脚仲間

に福島県立美術館を見学したいと希望する人あり、再び信夫山の西南の麓にある近代的デザインの美術館に行く。奥州街道の福島宿と桑折宿の中間にあたる瀬上宿には立ち寄らないままである、この奥州街道を進めば阿武隈川を渡る必要はないのである、荒川とか松川という支流は渡るようなのであるが、須賀川から芭蕉たちは阿武隈川の舟渡しを五・六度体験しているが、乙字の滝とか安達ヶ原とか文知摺石などという特別なところを訪れようとして舟渡ししているようである。街道は阿武隈川の西側を大よそ北上しているのであつて、白河で板橋を渡ってから大河を渡る必要はなかったのである。

美術館からは福島交通飯坂線沿いの道を一目散に医王寺に向う、山門内のシラガシの巨木のもとでホッと一息である。芭蕉たちは、瀬ノ上ヨリ佐場野へ行。佐藤庄司ノ寺有。と記するように、月輪の渡しを渡って瀬上宿から宮代村・下飯坂村と通じていた通称米沢道を経て佐場野村の医王寺に至つたのである。瑠璃光山医王寺は、平安時代淳和天皇の御代天長三丙午年弘法大師の創立にして御作の薬師如来を御堂に安置し、云々とパンフにあるごとくであるが、大鳥城主佐藤庄司基治公の中興した寺院で、源九郎義経に従つて奮戦した佐藤継信、忠信兄弟の墓のあるところとして著名、随行日記には、寺の門へ不入、西ノ方へ行、堂有。堂ノ後ノ方ニ庄司夫婦ノ石塔有。堂ノ北ノワキ

ニ兄弟ノ石塔有。ソノワキニ、兄弟ノハタザオヲサシタレバはた出シト云竹有。毎年、式本づゝ同じ様ニ生ズ。寺ニハ判官殿笈、弁慶書シ経ナド有由。系図モ有由。福嶋式里、こほりゝモ式里、瀬ノウエヨリ壺リ半也。”と詳細である、西の方へ行く道は、古杉が両側に並んで繁茂しており、古寺の風格をただよわしている。墓所の在り様は随行日記どおりで、石塔は正に巨石とよぶにふさわしい四角い自然石を重ねてあつて、それを石柱で四方を固めて雨露を防ぐ屋根をつけた異形の墓で、五輪塔などという中世の墓のイメージとは全く異にする姿である。元治乙和夫妻の墓も同様で、その他数多くの石塔の姿はこのあたりの墓の姿を示しているのかもしれない。板碑というのだそうである。

“堂”は鯖野薬師堂であるが、この御堂の欄干には、小さな石に孔があけてあつて、そこに紐を通してつるされている。耳石というそうで、耳を患う人が薬師信心の方法として耳石を奉納するようで沢山吊されてある。紐の切れた石は、御堂の木の縁側に並べてある、小さきまざまな形をした石で、その一隅に孔があいているのが珍である、耳の穴を象徴しているのかも知れない。

境内に入つて本堂の中には、佐藤兄弟の嫁が母乙和を武者姿で慰めたという伝誦を伝える美しい武者人形が安置してある、最近作られたもののようであるが、若桜は薙刀を楓は弓矢をたずさえた姿である。勿論伝誦顕彰のための今

出来のもので芭蕉たちが見たものではない、本堂の脇にある古ぼけた宝物館には、弁慶の笈、弁慶筆の下馬札、直垂の切や、二股の竹旗竿などが展示されている。文治五年八月十三日、源頼朝の軍勢に大鳥城が攻め亡ぼされた時に、この医王寺も焼亡しているというのであるから、これら伝来の品々がいかなるものかと思うことである。

医王寺から飯坂線の医王寺前駅に歩き始めてしばらくすると、医王寺茶屋木鶏という茶店があり、小憩して少し遅目の昼食とする。軍鶏そば、よもぎだんご、煮込み田楽など、中年の御夫婦経営の田舎の道端の茶店で、店頭には耳石も並んでいる。“芭蕉が歩いた飯坂の道”と題する権野健二郎制作というガリ版刷りの地図入り、図入りパンフをいただく、珍しく太陽が顔を出して夏の日の暑熱が復活である。医王寺前駅から終点の飯坂駅に至る、阿武隈川の支流の一つ摺上川の河畔の駅頭には芭蕉様の銅像があつて、芭蕉訪湯の温泉場であることを誇示している。水量豊かで急流溪谷の摺上川に沿って開かれた飯坂温泉は、福島が県都に決定した明治初年から繁昌し始めた温泉保養地であるらしく、江戸期の飯坂は田舎の湯治場であつたようである。今夜の宿は、温泉街を北上して北の端にあるホテル大鳥というので、テクテク歩き始める。新十綱橋の橋上から摺上川の溪流を眺めると、兩岸に多くの旅館が妍を競い、殊に対岸には樹木が繁茂していて美しい。花水館という旅館の

裏道を行くと、石段があつて摺上川の溪流に降りていく、昔の道との話である、芭蕉の飯坂温泉の章を刻した『俳聖松尾芭蕉ゆかりの地』の石碑がある、新しいものである。二・三十分も歩いたであらうか、赤川橋を渡つて温泉街が尽きて更に北上してのホテル大鳥である、小憩の後で大鳥城跡へとの話であつたが、疲れてバツタリ。城跡までは小一時間はタツプリかかるといわれては、日はまだ高いのに諦めることである。随行日記には「川（小川と言う摺上川の支流であらう。）ヲ越、十町程東ニ飯坂ト云所有、湯有。村ノ上ニ庄司館跡有、下リニハ福島ヲ佐波野・飯坂・桑折ト可行。上リニハ桑折・飯坂・佐場野・福島ト出タル由。昼方曇、夕方雨降、夜ニ入、強。飯坂ニ宿、湯ニ入。」とあるが、『おくのほそ道』では「温泉あれば湯に入りて宿を借るに、土座に筵を敷きて、あやしき貧家なり。灯もなければ、囲炉裏の火かげに寝所を設けて臥す。」と貧寒なる宿であることを強調する描写である。当代の湯治用温泉というのは、自炊による逗留宿であるから、『おくのほそ道』の描写のような宿であつたのは当然のことであつた。それを更に「夜に入りて雷鳴り、雨しきりに降りて、臥せる上より漏り、蚤蚊にせせられて眠らず、持病さへおこりて、消え入るばかりになん。」と悲惨な様態に活写する。蚤も蚊も当代では人間と共棲の生き物で驚くに当らないし、粗なる藁屋根の逗留小屋であつてみれば雨が漏るのも至極

当り前のことであるのであるが、伊達の大木戸を越すのに「遙かなる行末をかかへて、かかる病おぼつかなしといへど、覇旅辺土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん、これ天の命なりと、氣力いささかと直し」と芝居がかりで大仰に表現しているのに適応させるには、極めて適切なる前夜の悲惨さの強調であつたのではなかつたろうか。曾良の日記の記述では激しい雨こそ降つたようであるが、飯坂の宿でユツクリ湯に入っているとよい表現である、宿をキレイなりとこそ記していないけれど。

ホテル大鳥の湯は、豊かでやわらかい。湯質は、芭蕉入湯のころと違わないはずであるが、いかななものであらうか。

七

八月二十三日、月曜日。晴。ホテルを出て飯坂温泉駅に向かう途次、八幡神社とか鯖湖神社などに寄る、芭蕉様との関与があちらこちらに顕彰してあるのにいくらか閉口頓首也で、福島駅へ一目散である。福島駅頭で解散、この度の行脚に参加した人たち、高橋由紀・牧野久恵の東海道行脚の古強者兩名と令息牧野文昭君、同僚の土屋孝子氏、院生の高曉華（大連外国語学院からの留学生）、香口美幸、中馬越文子、森川恭子の諸嬢と文国一年の住吉谷玲子、土代妙子の両嬢である。

ここで一行と別れて私自身は山形新幹線で米沢へ向う、

直江版で知られる直江兼統が縄張りした街、上杉鷹山公が治めた国の城下町、一度は是非とも見ておきたかったからである。新幹線とは言え重疊たる山地をクネクネと進む、米沢が僻陬の地であることを実感する。芭蕉たちが訪れたところではないので、この行脚の記では触れるべきではないであろう。予約もなしで行きずりの宿が、一泊二食付で六千五百円也、大満足であつたことだけは報告しておこう。

注(1) 随行日記では可伸庵のことについて、廿三日の項に「同所滞留。晩方へ可伸ニ遊、帰ニ寺々八幡を拝。」とある。乍單斎の家に宿泊して、夕方可伸のところに遊びに行き、俳諧のことを語り合つたのであろうが、可伸庵の帰途にいくつかの寺と八幡社を拝したというのである。等窮の屋敷跡は本町にあるが、隣地が八幡町と言う。八幡社は現存しないけれど、現在の須賀川市役所のところに八幡社があつたと言う。いずれにしても随行日記の表現では、可伸庵を出て等窮邸に帰る途次にお寺や八幡社に参拝したと受け取れる、等窮邸と可伸庵とが相当に距離がある感じなのである。ところが伝誦では等窮邸内に可伸庵があつたというのであるから、随行日記の記述は不審となる。「帰ニ」の表現が問題なのである。可伸庵からの帰りにアチコチと廻り道して「帰ニ」と解したらいいのであろうか。とすれば宿はやどと訓じていいとなろう。